

5 中晩生柑橘

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p>	牛ふんたい肥 2～3t/10a
化学肥料 低減技術	<p>○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 11.7kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○機械除草技術 除草機械により雑草（害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・生物農薬：ミルベメクチン水和剤（ミカハダニ、ミコサビダニ）、ポ ーベリア ブロンニアアティ剤（カキリムシ類）など</p> <p>○抵抗性品種栽培・台木利用技術 土壌病害に強い品種台木への接木により病気等の発生を抑制する。</p> <p>○光利用技術 光反射資材利用により害虫を忌避させる。</p> <p>○被覆栽培技術 被覆資材により有害動植物の付着を防止する。 ・防虫ネット（株元被覆：ゴマダラカキリ）、防風垣、防風ネット（そ うか病の発生軽減）など</p> <p>○マルチ栽培技術 被覆植物（ナギナタガヤ等）、稲わら等利用により有害動植物 のまん延を防止する。 （耐病性等の向上のための台木利用）</p>	化学合成農薬成分回数 8成分以内
<p>その他の留意事項 有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。 砂壤土で、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 せん定による通光、授光の改善や枯れ枝、病枝を適切に処分する。</p>		